

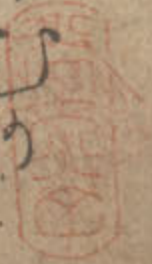
1002
9
1

律
々
々
々

古活字板



はしきくならまへくふむらう



ひるむまうりゆくうーなうーごうごうこら

となくのまはしくまやうーうーうう物ううわ

とれうぐやらのせよじまられてをねうーうーう

ううーううううううううううううううう

の種なうぬぞやんごとなうーの人の内ありさ

すを内うなわうー人もやねりなうとつりううう

をゆうここみあうれ子びふごうやをううまき小

たきとたかなうめうーうれうり志ものううや種

ふけきけううううーあひうううううううう

ふけきけううううーあひうううううううう



川のつらさをみどり思ふらむどいつとらむ折は
師づりのさうらやまーのうぬをれをわらじ人よ
を来れけしーのやうに心とれくよと信お細きづ
りきうもげよさる事ーづーのまかほひまうふ
ぬくーのりよはききしつみづをみえぞ増
実ひーのつひきんやうーのひやうーの佛の
西きーへよたぐふらんともおほゆふびくもら
のきすく人のかこつらふかーをひこもあつこあ
びんハくさうつらふ海のもどれたらきさうあ
ら海かーくさへたれおうちつひくさまふ
きくーのまぢいまぢうつらてこくごおほりらぬ

さうちのすじのこたかーたれうでたくとみる
人の心おとこまーれくお性みしんくさうら
おーのれぐたれ志れくさうさうむまれけえた
らあむハかどののやーうれより叩あれまさう
けさむじつらさうんこくこちひさ海らきんも
さきなくならぬまどむれをさうさうよくさび
ならんこをさあどさうあぢけとさ海くさう
かいかふわざなれあつたさくこくハくさう
えれみら他えお後縁のみら又ま識に云事
のくさ人のつぐみぢうんさうつみづうさ
まぢなとけさうさうさうさうさうさうさう

くて拍子とりうしあうすらそのつらげこぬ
らぬう拍のこしよひき

○いあー翅のひびくは代れ政をも忘れ度いのう
まへ八國のうこれつるくをときくどふらりべす
えようをけくーしてツギと思ひこころあきかた
まーこころ人こころうして思へふかくみのまき冠
しり馬くらさるにのこれあをぢるふたきこづひて
りらぬよ義薬をりしむることなられとぞ丸糸
波のき滅おもゆるか火陸院の禁中のうりせうく
せ給るうらうきた母やあれまうとそれをもと海をり
ならをもつてうーもすとこころゆ

○よろろつみりみーくともつらあめふあらん男が
やとさうぐーのまのあめづふれうこなふん
ちがうすんふあおーかされてとこころさごめ
すまごのひりあ親れゆさめよめうこころとけく
ひよ心のいもまなかあふこころに思ひみづ
きさういひとらねづらまごろむあなふらう
おろーたれこころとてひさすたれこころあ
そあーご女おたやすうす思ひ終んこころあ
こほーうたふか目さたれ
○後の世れこころあろー目すれど佛のみらう
とあぬあうゆにくし

○不孝おうれへスーしづる人の可ーらお海ー
かとおつるうお思ひこりさるまやあてしあつ
りならふうおつこめて。まろこともなくあつ
しーらうーあつさるここはわさるかーお基中
油まのりひらん配たいの月つぎなくてみんし
さもお海そぬし

○まが方のやんことなららんうきおーて教な
あつひおもさとりよそれなくて有らん。お中書
に九条太政大臣花園左大臣みまうたえん事
とねづひぬるり深波のおとごも子総おをきぬ
がうくゆり采のそこれぬ人おをまろえまことま

つとをて世よ絶ちぎの箱の福しくつとまやり入る。生なま遠とほ太
子の西し巻まきこつて母てけり勢ぬけさうさおもあつと
ふれおーことあつ子総あらきとと思ふなりと
ゆりりりことうや

○あづーしとあつゆる阿なく。鳥部山のきふと
くらさうでのそほしけらなくひさしむらつみ
油のあられも物うじををあぶあかふらうい
みづたれいれらあつ福とさるお人げらうこひさ
志ふハなしうげろよの文をまら。夏のせこれま
杖とさうぬもさうーほくくこ一年とく
まほたふさおよあうれどかーやあつとあ

と折もさぐりよきと回すとも一軒の夏の心ちこ
そきぬほつそぬ世み見うくさ葉をもちえて何
つしせん命ながたれを奪抄を志なびくとも
十もころぬほどくそ志なんころや氏りおぐ
けきうれかぞえさぬれどころをえはるんも
かく人スルまどらりんこととせひ夕の目よ子
孫をせしてさうおすをみびまぞれ命をあら
おしひたまき世をびさがれんのをゆめおれ
長もさぐりよきたらゆにいな望おさ海ししえ

○世の人の心さどつすとも久敷スリもしうど人
の心とをろのたりおれ白ひおらさるるこの福

なりおとさづくを衣蒙ふたさ福をせちりながる
くそなうぬ白ひもや必心とさうれすらそのなり
久米の油人の抱あらし女のくぶらさるまこと
ておとさうしなびらんをさるさうおまうしけぶへ
ゆぐのさうらに肥つがらげえたらんを年の
りろさうねむさうつらんや

○女を後のつでたうらびう人のめたつるのめ
まは人け福んむへなごをものつひさうあまひに
さう抱おしうそさうれきうに少れてうらわ
れさ海うそ人の心をまどけしきるて女のうら
とけさういもおれおを折しとも思ひたらすだ

ゆむはもわくぬ目ごすーとくたる志はあを
くく色をばこわのゆへなり嫌すー電悪のるを
根もわく源とく六巻の樂欲は月志といるど
とみれ狀體志のへしうれわーみくくのふど
ひのひとのやめびくまのころ巻ころもふりな
とさるもをろりなりもかりおなりとみゆ
流されし女の後と比とふれろ鑑もや大衆もよ
く流れぐま女ぬくろろめ志ごうて物まは重よ
を解のしー果なりすふ流とぞりひ流こへゆる
まづのくいあー物とわろ物趣くはくししむ
ましこのふどひなり

○歌君れけさぐくーしあわくハカー流ころの
をどりとをそるると真のう物なれう人ぬくぞ
やりおほなりーころおをさー入ころ母のまも
ましこくどみゆたごーのたあ町ーむさ
らくのなる祿とまぶら物少りてわごとあらぬ
まやのまもんつるさゆーをれこといの
たよりわろーむうらある調音もるはは響てや
すうのかりう心にくしとみゆまはくめ
た見えの心をはくーしてまづさたてのうのや
とめめつりーく響あらぬ調音もなすべ
お裁の草木もやむめまうくすつらりおせ

をみるめもろろ〜とつてまじりさてもやを
〜へ徑づま又町のまのなふまとも成るんと
ぞうらみろじり思ひ致く夫こそを家おま〜
ことご海を〜りりるれ後越太ちの大臣の
寝ぬ〜鶏ぬさ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ろとあゆみ〜とびのわたらんハ何〜と〜
〜うぬづみ〜は〜と〜と〜と〜と〜と〜
まは〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
のあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
ひ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
と人の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
おがえ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
○神望月のは〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
墨に〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
為と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
つまの〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
し〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
か〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
ろ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
ふ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

もくすーならんらるるがらりりはるるびーくのこひ
あつらーらるるあーらるるさあさあさあさあさあさあさあ
まじむたはるるさーの

○おなご心ならん人やさあやわりお抱ひして
おろしふことともよめらるるがまこいもごうなく
りひながさまんころうれしころおさふふらるる
人の頭をどれど落たごさごうじとびりひお
たらんをひとるあおんちやきんたごひすーい
つんほどののこく強まげよとまのひあお抱つる
いあくりをまごみおとわらん人ころ我をさや
を思へたごあららるるみさるるあらさごうとも

おのこ強つごつれぐながさあめやおもるるご。
まふもまあーらあごくへもされといとーらるる
あらん人をたごはるるわーごごらん
福らうあらの海あやの心の友よやりるご。
おごくおのあうわぶまを日ひーまや

○むらり燈のりこにえをひらけてみぬおの人を
ともとすらるるごよぬうなごまを日ごならもこ
を文選乃あられならまく白我え葉老すのこ
じ南島の篇は國のこり勢ごものりきつるものも
いあへあひあつれなら事おはら
○おあらうおあらうまおならあやーのーげあ

うらの志まごもつひかつ積むおもろくたう
後へふ井の志くもゆを井の志とり人ごやう
をなかりぬげはの言ハ一ヤ一にのくいひうふ
へうらとこみ申れそつれごあらさ言ごものやう
おいうおごやことごのあもあもれよけーまお
がゆるをなう愛愛が急よらゆ福なうたくと
いゆるもあ全集のわーれ秋くづとやいひつ
たゆるれとつたの世の人ハうとぬづかろけ
らうらそみえごうれ世のうらこもやまごうと相はれ
ふひのこおりーばうらまろボコをかくいひた
てられころもありごーし源氏の物換りーハ

酒ときだうおとぞりきう新古今もや積る松さ
るみ祢一ーさび志かとり人頭方をぞいふおほ
を海こははあーさごけらうまがたうをやえ
ゆらあごれごあのうらこも品評判の時うら一さ
うーさうあうて後うを評文スー感じ作下さ
進らるうー最長う日記よそりあつううこれみら
のこいーうーるー果つーぬねどりよろけもあ
進いづさや今こふ見あゆるおなり相方枕をび
のーの人ゆあれをさうスー同一抱一ーあ
どやとくすれがうーて染もふよげよあられと
少のきみの染茶総柄の野曲ノノクのこともうう又あ

つれながらこゝの御方のめもさる人はいふづつ
ふつひすてゝるこゝろさきみをおひかゝるこゝろ
ゆるすべし

○いづくこゝろもさるづつゝさびだらなるこゝろの
むらむらすれうれとらさうつゝの御こゝろありき
の御りびこゝろも山墨ぬどつとかなれぬ事
のそぞおやう御教へたよりとつて文やろ
のまことのことびんごよわすらぬなごつひわ
ろこようおつゝたれさやうの御つてこゝろよろづ
すゝんぬりひせらぬれさきと御調度まがゆるさし
うゝ御ある人こゝろよえ人もつゝのよりをおひ

—とこころみゆもさる社などすゝさびひてこゝろ
ついでらもたつ

○神樂こころあはれ御つゝくさるこゝろの御たぬこゝろ
さきくねもさる御ひちつとさうつゝの御すゝさくたえを
御御おひ

○山さおつゝさる御つてたよけりう御たつこゝろ御
づれもなくんのよこゝろもさるまぬんらすれ
○人をさる御つてさるまやうおさる御つてさる
けて御もたす御つてさるがらさるんぞつみ
の御つてさる御つてさる人のとつてさる
さる御つてさる御つてさる御つてさる御つてさる

るハこもれを包つて慈しむ思ひいでしゆゆい
吹のまよげすいぬのたゆたうなりさう海をくま
すべて思ひすてがごとくおのり灌佛のひら
けりのひらぬ葉に枯涼——ぢふあひゆく福あう
ぶのあしれも人のあひさき海をれを人の作
らましこころまにさう福をれ又丹のやめゆをこ
ろさかたんぬさうの針ぬめくをぬどむがうり
らぬうし六月ぬさうのや——ぬぬり夕ぐけれ
さうくみえてうやま火ぬすぶれもらもれがら
六月後又たうし七夕のたうふそなたのうしあ
まやうしぬぬはじりかたりかたぬがまてさう

は新の下祭いろはくぼどまさゆりうはまふと
とらうつめたるまそま海のもろたゆたうろ又盤
ふのあそくあそおろしぬれりひたぐくれむみ
ゆ源茂物ゆきま抄草子などりこしやりまこ
まを同づくと又りたうまひげこまもあうど
おぼくえしといふぬを撥ゆくあくまごたれど
筆すりまうせつてあはさかなふをさひまをうり
なまらへつあかぬおれど人のみろづまらまを
まらうて冬ぐれのききまらう秋もそおさくを
とれまらひまらひの草にもみらぬのらまらう海り
ておのりまらふをらるあそくまらうおららまら

ふらふらにわたりて、さしきよのふれりてく人ごもふ
つうにあらはれはななくめをききたれとさあ
さ抱きしきみる人もなふ月のさきくすめは女
日のふりとのせう。いぼろふ福なればは若るお
の使たるのむじをめりれふやんごしては現るるど
もなきく春のじろふまよりりりさこ祥てもふり
おしれも致くさ海づりみまや。追儺り空
祥よはくくくう。おこさるるおれいごも皇の業い
たうくくまに松とももこもふくまぐみはで
人の口なくまりし。あうりあて何事。ありあ
くしごとく。くまはく。さしてあし。はる露よ

海やふらふら。つまぐく。よりさす。ぐおと。たぐ
かりや。あそ。まの。名。後。も。ん。が。そ。あ。ね。な。る。人。の
く。さ。あ。そ。ま。は。は。り。目。さ。い。は。は。え。や。こ。も。ま。れ
ま。は。は。の。け。ま。の。お。こ。ま。は。た。す。ら。こ。と。お。ま。の。つ。り。こ
そ。あ。を。ま。さ。な。ら。し。く。か。く。て。的。ゆ。く。ら。ら。け。き。ま。あ
え。れ。よ。に。り。ら。う。い。ら。と。ま。み。え。ね。ど。ひ。ま。つ。の。め。め
づ。ら。い。ま。い。ち。ら。ぶ。す。り。大。路。の。さ。海。松。く。く。目。た。り
て。い。れ。や。り。み。う。ま。い。ま。な。り。ら。う。又。ま。ら。れ
。か。ん。ご。う。と。う。や。い。ひ。せ。す。て。人。の。あ。の。う。の。は
だ。も。た。ら。ぬ。ま。よ。く。く。の。若。跡。の。こ。う。ゆ。り。現
と。つ。ひ。し。ら。う。海。く。く。ま。は。は。は。は。あ。れ

○うらみのしを丹づるかあらうなぐさび物なれ
つろ人八月げのまおきし海さきれいあらうと
いひし又ひとりあはうきなれやあうさひし
ころおろしけ連なりすしれじ何しものもれ
るうあらん月花はさうなり風のそあう人す
心しけくの連志にとぞあてさうくながゆくあ
のうし現まう時をももろむつてふけ連院御目
兼東流ち熱人のたあふとく海取ことか胸もせ
ずといるら初とえゆしころあつれねあうし
愁慮も山津すしあうびく魚島流みまじむたれ
志じとり人まへをくあまえうあう海うひ

●
わうえらるるらうらうなぐさきことあつらう
かたごとくもあうあ世のそごうとつらうらう
うさ望下よあうくうならゆく免れりの本
のるはたくみのけく連なりうらうまうつらも
乃とふ代の染うらうらうとみあまえあ相物ど
ぞあれほうごどもをうみへあうらうらうらう
まはれうらうならうらうとせくなんはうへを
車もたあふ火うくげうとらうらうしと今や
うは人をまうらうをうらうらうらうらうらう
人あはてといふうらうらうらうらうらうらう
といひあ勝梅のほれああなうらうらうらうの海

やううつ子紙がうろとひふらうら抑とぞある
三人は折目とられし

○抑とろへたる末れとそり人ぞ折れをのうと
さびうらまを換らうふげの始めでたさ袖子折落
巻の約の積い何れおふのれどそりみーともあ
こゆーあやーのわま色何りぬづまかあーこそ
小枝おきるをア戸れどもめでたきうふこゆき
凍スーふのまふもせよといふうらみーはれ
ふ紙のれとぶのうごういともしとうられど
いふ又うでたう上つ乃陣を事おこがるる
さ海をさうならと折目れも人ごもの志とらとぞ

がみな鏡うらも折りーさだらうらまを紙あきと
づーあー叫ーこれ折やりぬらうあそお叫ーあ
後肉待取の浮鈴のこことやうてまを優なり袖の
ことぞ懐大あるの太政大臣の保られり

○齊家の型まおおりーやすありさ海こころをさし
まおもーろふふとのあごりとをおが響しーう
佛のといみくならごうめ紙をどつふおれも
叫ーすんで祢の社さうすて叫ーまなためー
ま酒なれやその少りたる森のまー折たぐらう
ぬーま垣とまこーてあのまーゆふのまを
なごりみー叫ーぬらういこまおおしー

伊勢 賀茂 春日 平野 佐吉 三福

吉田 大魚野 松尾 梅子

○花あすろ鳥川の淵漱つ子なぐぬ世あ〜つれを向うの
里こしとさまたたぬ〜むつな〜ひをまうひて花
をりながらししつらも人き海ぬ壁らこなるこの
つらぬと見のそ人つらつら里ぬ桃つり李り福つしね
も種やとあふつ着をこ〜らんま〜てみぬいお
〜人のをん事〜なるらん此のそごつとりの
なふ氣持及流成吉れとみろ〜志と〜る里る
愛ししおろろさ海を急ぬま流な雲波乃池りみづ
う敬終ひて老園抄やくらせらぬらうのほろ〜の

とみろ〜の流〜流〜世の町〜め〜ての末は
でと花舟志をき〜時つらなるん世やもろ〜の
こあせつそん〜花舟そらんや大門えだ金堂おど
らろくやぞけらしし〜花舟の〜南八つを
焼ぬやけ金堂へを戻たふま〜ちるま〜て〜り
ちつろ日とさ〜望雲書はげら〜と〜を〜こ〜せ
て流り〜と〜丈六ちやうの佛力祈〜た〜と〜く〜る〜
ひおけ〜と〜成せい大細〜の教〜ゆ〜が〜け
現病とびあぶやろふみゆろ〜あ〜れ〜なり〜流〜み堂れ
〜も〜ま〜ご〜ゆら〜め〜も〜又〜つ〜た〜て〜う〜つら〜ん
り〜ら〜ら〜の〜名〜流〜だ〜ふ〜た〜ふ〜雨〜く〜ま〜を〜れ〜け〜〜〜い

しどろむりのと跡取もつれどあぶりおきまは
人もおししをれをうらげおみごう世はでを
押ひひをふてんころもりれうれべれ
○風も映あるまごうのろお人のふれ花にたれう
年月を心あざしつれと穿ししことのてごうお
わとれぬ物ううがふのあすり殿めならひこ
うがふ人の初うりもまごうそり殊一ふもれれ
まごれをたろゑ急のうまらんゆり紙うおししひ
みろの地まごのまら移んことをさげく人も有
らんか培川院の百首のうこのかーすー
ひくーみーいとる塩ねいあますーたりつご

ゆあーまのまみまのまーとまびーまきーれ
まんこと待まらん

○浮國ゆつこのあきおこれりれて敏重内約おま
たーたてふつごあくほごころうごまらなう心か
うけ建新院のありうあぬてはまふませごらひ
りうやうや

このもりのともれみわのこよをあてり
るぬあすーもれを地まー今のをれことまき
まにまごれく院まやあ人もなまごさびーあ
なりあくおおるぞ人のんもあーもれぬへま
○祿園のまごらうあまれならことまわらごいあ

乃所のさ海ゆと枝なとさびりーのいさだき
紙^{おの}もて布のとりうつくーを^{てい}調^と存^ととも
をろうりふみか人の所うづく太刀卒結おぐこ
とさ海なりうゆーしん

○志づこお思ひてし義はさうー町の意志このと
うせんこかなき人しつまつてはながきふよめを
さひよ何とかなきをうくとりとさたあ跡ーを
町どと思ふほうこおと全まにほるわーふなき
人の手さうひ急う気とさひころえ出たるう。
くむうれなりのんらとればはあうう人のえをふ
久しを成ていつならに世のつれ年たりらん也

心かを無なりうー手なれしぞうくいさも。
んもなくてうつろも久しし死りと也ー
○人のなふ跡ならうりなうまなく中陰のほど。
少置おとにうろひと使わーくをむれおすー
つたたのひかて後のわざをやとなをあるん
あもいーし白粉バツやをささるほとを物お
あおぬうその日せつむ物さけなうこづひみりふ
事もなく我町ーこげも福ひつたなくめらう
地をすーゆえあつれぬうとつをえりふ海つそ
がうーに始しえうやいねぬうるづまーりく
のこをあれ町ーこらうのたあい豊なりと

がれぞいへはくうあふらよのなりおらりつむ。
人の心を致して抄がせぬま月をてものゆと
を致くもやめく縁とちうのを目こみうとこ
いるらことなれどはりんとをまきしげりや
笑ぬにやうになしごとつひてうらもまらひぬ
かういきうとさこの中スう抄さうやうさうさ
ほづりい海うでほくえれど福なくさやもさ
ひま祭少りうのひみくタノ商敷の月のまうこ
とやぶふまがなりたる思ひかてまぢぶ人らら
んかどさうあらあうも又福なくうせてまけ
ふもりのすまぐくまあしれとやままこよ

さうを何とやふわさもた事ぬれをいつ積の人
と名をぬすくさうど年くの番八見このまう心
あらん人をあられとみる懸る紙つてをわら
おじまびしし松も子達とまうで薪ふとさうま
あらさけりいすう建て田となりぬそのこさだ
スうたくなりぬらぞうまうま

○雪乃れも一語うやりたりし船人のまうま
るまうとわりさふ紙をるを書のこと何とも
つしざうらと事一にば越まいつぐみると一筆
のたうまわほごのひがくうらん人の
お海まらゆことまう入るふりまをゆはく

○甲斐を海らぐひのやうなり。地いあくて口は
かどのほうながみ。そで出たるうひの母。ななり。
茂蔭國會津と云浦。すゝめ里し。越こころ。いも
のく。越あし。とせや。ゆり。とせ。いひ。

○手のまろふ人のい。く。ゆ。く。せ。ふ。つ。み。ち。ら。す。よ
し。し。こ。ご。ら。し。と。と。人。お。あ。す。ら。は。う。ほ。こ。

○久しき喜ほぬは。む。り。な。ら。ま。う。し。じ。こ。ま。が
と。こ。た。り。お。り。ひ。た。ら。れ。ま。ま。ら。ま。な。ふ。ん。ら。す。り
み。あ。の。こ。こ。り。仕。丁。や。う。つ。ひ。と。り。あ。ど。つ。ひ。に
あ。ど。こ。ら。こ。う。あ。ま。ご。こ。ら。れ。し。た。れ。さ。る。心
ご。あ。し。こ。ら。人。ぞ。う。ふ。と。人。の。中。ゆ。こ。し。さ。も。ら。つ

おぐまことなり

○物々へだてなく。なれ。こ。ら。人。の。と。も。あ。る。町。我。も
心。と。ま。か。ひ。た。け。く。ろ。あ。れ。さ。ゆ。み。あ。る。こ。う。今。又
お。く。や。を。ゆ。ど。つ。み。人。も。あ。り。ぬ。べ。ひ。ま。と。が。証。書
み。ま。ふ。し。と。う。ふ。人。の。味。と。ぞ。お。ゆ。ゆ。ら。う。と。ふ。人
の。う。ら。と。け。こ。ら。こ。し。れ。ど。つ。ひ。さ。ら。又。う。し。と。お
と。ひ。け。さ。ぬ。る。

○名刺よほ。つ。つ。れ。て。し。つ。つ。な。ら。つ。む。さ。な。く。一。生
と。ら。う。し。し。り。う。こ。う。を。ろ。つ。る。れ。賊。お。ゆ。あ。ま。ま。さ。か
を。ち。り。す。し。は。ど。し。お。を。し。ひ。ね。を。さ。ぬ。く。な。ら。だ
ら。から。身。の。お。ら。し。ま。を。金。と。し。て。小。計。を。あ。く。ぬ。と

色人のためよそで且つ〜つるづゑかを海りなり人の
の免頭よりあこび〜ひらたの志と又あぢさなく
大から車取らる馬金出りりごつともんつ〜ん
人をう〜してとありなりとぞみろづゑか金を出よ
すゑまを例よなく〜利よ海とふをとどれて
を海りか取人たり〜りれぬふとわづき世に
強さん〜うわ〜ふほ〜う取包され位れ町くを
〜しごとかなふ〜もとどれたる人とわを〜ふ
〜ふを海りふ〜かなふ人も取〜生れ町〜
ある〜き〜位〜りのが〜れ〜とま〜びろも
あり〜み〜り志取人を人〜づ〜りや〜れ

位よと〜町よめりず〜を〜わら〜又〜り〜ひ
〜ふ〜り〜さ〜位〜の〜び〜次〜〜とろ
の〜ら〜と〜心〜と〜世〜お〜と〜れ〜ら〜が〜ま〜れ
この〜海〜ほ〜れ〜を〜〜〜思〜〜し〜ほ〜ま〜れ〜
を〜取〜え〜人の〜を〜ふ〜ろ〜ふ〜が〜お〜が〜び〜ろ〜人〜ろ〜志
取人〜とも〜〜世〜も〜と〜〜ら〜ず〜に〜なる〜ふ〜ろ〜ん〜人
又〜と〜ま〜や〜り〜ふ〜ま〜る〜し〜誰〜も〜の〜つ〜ら〜誰〜お〜あ〜志
られ〜び〜し〜と〜と〜ね〜づ〜も〜ん〜は〜た〜れ〜を〜又〜う〜〜と〜め〜も
や〜た〜ら〜あ〜の〜ほ〜に〜若〜の〜こ〜つ〜ま〜ま〜よ〜蓋〜な〜〜ま〜ふ〜許
が〜よ〜も〜取〜〜と〜海〜り〜か〜ら〜位〜志〜の〜て〜ち〜と〜り〜と〜め
賢〜と〜ね〜が〜ふ〜人〜の〜た〜ら〜子〜い〜ま〜〜ら〜學〜取〜い〜で〜く〜を

りつりあり。其結ハ狂悖の増長を依なり。此の
るや。さうさうなびて。此れを漸まじのらおろく。此の
なりつをうちとく。いふづ。可不可と。一条おつ。この
なりつ。その吾こそ。よここ。この人を名もなく。極もか
を現も。なく。必も。な。誰り。志。た。違。う。た。おん
こ。ま。違。と。ふ。く。一。色。法。海。を。取。り。ま。や。り。く。ま。り。と。よ
こ。受。恩。始。失。の。さ。の。い。し。を。ら。ざ。れ。む。な。り。海。よ
ひ。の。心。法。り。ら。て。心。利。の。事。法。り。く。し。ら。よ。か。く。の
ご。ご。義。事。一。を。皆。物。な。ら。し。よ。ふ。た。ら。ば。祿。り。よ
す。ら。た。ら。ず。

○戒人法を上人小念佛の何處にをり。され。く。此を

よここ。ら。と。ゆ。り。事。一。い。く。ぐ。と。け。さ。ら。う。と。法。や。め
ゆ。ら。ん。と。や。た。れ。ぶ。自。の。さ。め。た。ら。ん。狂。悖。也。一
ぬ。人。と。あ。こ。へ。ら。れ。り。ら。や。と。た。う。と。ら。と。や。り。う。
い。ま。う。ま。や。う。を。一。ま。と。心。つ。ま。一。ま。不。心。と。思。る。が。い
不。ま。や。や。つ。し。れ。た。り。の。是。と。た。う。と。一。ま。う。こ。づ。ひ
な。ご。う。も。ね。ん。ゆ。つ。も。た。ら。ざ。う。ぢ。や。う。ぢ。と。も。い
つ。れ。た。ら。と。あ。れ。も。又。た。う。ぢ。一

○因幡國小川の入るとうやうみ。考れし。と。め。あ。ひ。ん
ら。う。う。と。ま。さ。て。人。の。ふ。た。の。ひ。ま。さ。り。け。れ。を。び
ひ。ま。め。い。と。衆。を。の。を。食。て。更。ふ。ら。ね。の。た。ら。ひ。を
ま。し。あ。り。あ。ま。さ。う。あ。い。れ。く。と。や。う。は。を。ね。人。ふ。え

申づるにあらばとてたやゆるあぐさつと

○又月又日實後のくく想ふとて侍としし小車ハ
おも難人をへびくこみえぶこししむ者なりて
産ちのこしにありされどさふ人抄なりとら
みみくまけ入ぬふやうもなきうくほありは
じうひなるあふら入本す一法師のがてて本
のまゝよつ井と物つるうりともはけされづ
りこう眠て考ぬべふ町すりちとこやすも産く
なるこれとみる人あぶあさ見て世の志ま
そのうぬぬくめやうえ技のうんよくやとさん
ありて好もたらきふとま一我んおぬと思ひ

志まへおとれらの志やうしりたうらいと今
ゆもやのらんそれとすねく物うて目をく
そと海りなりことそが紙はさつとる物とこい
ひされとおなる人ども海ことよとたううゆ
まむをろりにんそひてみかう一海をみむ
つてまぐく想いらせぬへとくお強さつてらび入
侍よまのやどのことつり。誰のこ思ひようぞ
んたれどもたまの思ひりきぬんちして
ひひよらうらうらよや人本石す一ありねを町
すしとりと物に感ずらうりかふす一あらむ
○産指の中物とりよ人の子にゆ雑信とて教お

の人は師すら憚りけり。氣^けはあつて病ありて。
まのやうくたふすほどおもしろの中^{ちゆう}にたが
まてのまもかおつてふききききききききき
ろひたれどまづくつてなりて自眉^{じぶい}新^{しん}時^じも
つれまどひてうちねひたれも物もみえず。二
の舞^{まゐ}れ^らぬ^らやうは又^{また}もつらつらつらつらつら
鬼のつがふ成^{なり}て自^{みづか}をい^はち^まの^{なり}てみ^まけ^をひ
ふひのほどもれは成^{なり}ておろそ坊^{ぼう}のうら
の人^{ひと}もみえず。こもり井^いで^で辛^{から}ひ^ひを^をい^はり^りて。
が城^{しろ}ま^まげ^げら^らり^りと^とな^なり^りて^て志^しみ^みと^となり^りて^てお^おろ^ろそ^そな^なり^りて^てお^おろ^ろそ^そな^なり^りて^て
はむもあること^{こと}に^には^はら^らり^りて^てお^おろ^ろそ^そな^なり^りて^て

○春のくれつこくねどやうみこしなりをよのや
しーしーぬ^ぬの^のた^たく^くふ^ふや^やく^くま^まぶ^ぶら^ら物^{もの}少^{すく}り^りと^とな^なり^りて^て
みち^{みち}ま^また^たが^がれ^れつ^つを^をた^たえ^えま^まぎ^ぎを^をし^しご^ごを^をた^たえ^えま^まぎ^ぎを^を
入^いて^てみ^みま^まも^も南^{なん}面^{めん}の^のり^りう^うー^ーま^まれ^れお^おろ^ろし^して^てま^まび
志^しき^きお^おれ^れま^まえ^えー^ーま^まを^をつ^つた^たど^どの^のよ^よま^まが^がど^どま
つ^つま^まな^なみ^みも^もれ^れや^やが^がれ^れま^まり^りみ^みま^まぎ^ぎを^をつ^つら^らみ^みま^まぎ^ぎを^を
お^おろ^ろし^して^てあ^あの^のま^ま女^{にょ}け^けら^らま^まを^をう^うら^らと^とけ^けれ^れ
ま^まに^にく^くく^くの^のま^まや^やり^りな^なら^らま^まを^をし^して^て机^{けい}れ^れう^うへ^へま^ま
ま^まを^をま^まら^らひ^ひ海^{うみ}お^おろ^ろし^して^てお^おろ^ろし^して^てお^おろ^ろし^して^てお^おろ^ろし^して^て
くん^{くん}た^たづ^づま^まふ^ふら^らま^まを^をし^して^てお^おろ^ろし^して^てお^おろ^ろし^して^てお^おろ^ろし^して^て
○あやーの^の行^ゆい^いあ^あま^まど^どの^のう^うち^ちま^まり^りつ^つと^とま^まり^りつ^つと^とま^まり^りつ^つと^と

よしの月がさす。交りひさだのうらねと流や
をうふろ持家よあれたうねさつむゆへげんた
ろさ海までゆくやうならわさへひとらとさう
てうるのねる田のなりめほろるをいふこの露
みうがら行くまけゆく福重をとらうど映とさ
ひたるあられを雲さねへさ人もあつらうと思ふ
よせうんこくさうさうかへてえをうり行くゆ
むゆととゆさなみく山のまじしよ想いのまうら
る入ぬ摺りたる車れみゆはも都よりいめ
とよ流心流してまも人もとさうしうくのみま
のおりしやううらうては佛事ゆとさうさうふ

よやどいづよ西雲のこく小法師ともはらうたり
よさききの風よさうまればらを流流白ひも
あやーびんちまきんでんしり西雲の藤よかよ
も女房の道風うういあやんめかなふ山里ともい
つす心けりひをさうまんのまくおさげま流秋の
聖うをさうあつるあおうづりれてびーの祇の
ごとくあーををうまのまねどをうたりうやこ
のうらーりをまねたせうもりやま心流して
月のまねを流してさだめがう
○ふせの二位なきうとはあま流とあまをしした
こいめを接りし人なりとさうと坊のこくうらふ

大なる榎の木忍なりけしれを人譽の本比そう志
やうとぞのひらりうの名残るるひらきとせは
本とさうしれすーきううれぬのつりひきむさふり
ういの後正とつひひたりひよく版立ててこころく
いそげりすそたりたれむさふとば母をなかりが
つうそわつるもれは^{かりげ}垢池の清正とぞいひらる

○柳魚の色は鏡笠法京と号するそう有なり。彦く
かうだうまきしるぬまはふとけきにくらとぞ
○成人清海へふいことなるお老くらあふはゆまに
まはらゆるがささひくえさめしくいひまこ
おきまご庄お向事取おくそのたふまうや

とひひきまはもひくもまきすのくひはひらるる

そまむいノとそれくうつうたらてもいふれ
むつら^{あひ}あひくあぢねいぬじさぬら^{ちゅう}とやまてや
しなひまのひき^ハゆまらこまおつーよまを
づ兵今もやそれひたりんとあまじふくやーづ
おしといひたり^マきんふさうなららん叩

○光親の流の光勝梅葉のしてさふらひたるとそは
おへめされて流石をたおされてさそをられあつと
さそらひちらりたるついつまこほとこ伊のうら
へさー入ては出ふあつと女房のれまこれ種ー
心れとてうれど^{わかれ}尸養者まきとそ識のもちふひわ

ごとくかゝるやと感ぜさせむひけんとそ
若来つそきてみら流ゆせんときつこしなり
まもる印塚^{ツツ}たゆみやぎおまの人もやうららざる
小病をうけてごらまらふ世流こらんときを
とふおころうりごまをゆるすのあやまれぬこ
ともしたし流なれあやふことりよを流ゆこふ
わくす事^スをすつごまゆゆるくゆくを
づか事^一をすつごまゆゆるくゆくを
まぬ梅ももつひあらん人も人をこまを流ゆ
せふまぬるこまを流ゆゆるくゆくを
もつと流ゆゆるくゆゆるくゆゆるくゆゆるく

つともうすく佛なることしむる人もあつる
ごとくじつるまふ心を人来て自能れ事事をい
ぬ可着ていもく今火急のこと有て流ゆ。約々丹
せふれまもる事流ゆこまを流ゆゆるくゆゆるく
うまもるこまを流ゆゆるくゆゆるくゆゆるく
戒といひゆるを流ゆゆるくゆゆるくゆゆるく
こまを流ゆゆるくゆゆるくゆゆるくゆゆるく
ながつこまを流ゆゆるくゆゆるくゆゆるく

の海長の以伊勢國より女の鬼なるなりとて
のがりてありてその女は女目むら
る目ごとくは氣白川の人おれ見ふとておる

又折りよを西園寺ふるつらうとししなふハ既ハ
糸繰ぐししたぐりくうこしくにぬどりひあ
るらまきさしをみくまこつふ人もなくうらごと
やゆふ人もなし上下つら鬼はふとのこいひや
やまうばは山一りあむ院遙へまうり待こふ
回糸しらうらとさ海の人みをおとさしてりら
一糸並刺る物もあごとぬく志こあむを至命出川
の途よりまらやまきむ院の西棧敷のらららまよこ
をりう懸うもつらうをあらまらむもくかなるま
こともをのらざめてとく人をやまてみをぬく
おがのこのるら者なしをぬくまをぬくららさ

もしがさくしてハ園論にこつをみぬてふこととまの
ううやうまをゆそ一なんで二三日人の目づらふ
ことゆ一とぞりのれふのうらごとまゆめの志ろ
しと志めをかりたりとりふ人もゆりし
○藤山段の酒池ふ大井河のあをまうりせられん
とそ大井の太民もね舟をて氷車渡けくらせら
まきつらむはくのためとぬてぬゆもりとなとい
たしてむあたりくるふたこめぐるらごまなれ
まむぬくが紙志けまきも路スラスつらでつら
けつらなせりけりゆま治の墨人をうけてま
らつらせられりゆませすつらみゆひてまらせ

いももまがらぢもろしんこすれどだやましくはれど。
ひごふてたるごころをききもろなりやまじづが
やうなきてこめたかりのぢくよみこひら紙
うらりもてま紙ひさの巻をほりせて葉おろを
こしーのふつわてはけるるをぢく人のあや
こみるこころぢりなしをこしーのりとおさこ
入てじりひ井はちきん有様さころ英様ならけ
めゆとつふもまもろし急おひひさくや巻す。
つふぢくことをふくこみえずにたるをこし
となしとりの人ご文にわちへゆてたこまふとの
老うら母おとぢづみふしり井てたふぢくめは。

愛らん世ぢが巻決うく紙福よある者バまやう。
たとひみくもれうされうするともいのちバ
り世をゆどのりつみさらんこ力をさくひが
ぬ人とて道らのしべとふつるにこし入てま
紙を巻だてく紙もちたるららひこしたるす。
見くもれけうぢながうぬけすまつこし紙
ひぢら海うけええし巻を井たつまつと

○西宮小つみぢ紙思のけりけり紙ついでさうひ
出してあろつんとたくむぼろまもろ紙の
紙のうひ法師もめぢぢのくらひて風流の紙子
やうの紙ねんじらうの紙れと出て新風流のも

のよ志なくめいねくさうびれ墨の使らるるおよ
うづえをさしてお祭流りうけねど思ひゆるぬ
さ海よりして海へまりてらごそそくの町にお
おたるとうまうと思ひて表町こちうびあがり
てまほる若れひーろれなを井てうこうこ
うしうこれあられお祭をたうん人もづね
ら海へまらひねりむみられふおどりひちるひ
てうづえほる本はりこよびえてお珠をすす
おこしくしとびとびうぐさどちてのうなく
あうふむておれもとりまのあられどけやく
福もろしどおのたづひたるよやとそからぬお

もなくお流あこれともなるさううづこたる
と人のえとまておおへふつとふらふおぬすめ
おがらりの法師ももことれもなくてやうく
のさうひつうたらておおるすけつあふお
奥あうびとびとびとをあいのかきおれなり
○おのほくつやうを友をひいとほしきをりの
ならおあもまはつあつあう目ろあほお
るづこおとかりうのさ水はすぐー番なり
あふおてながれをほらうりおすぐーしし海
なおおをるすー遺戸を幕のふよりをら
と井のたうまふゆさまぐもあう火くしし

道徳を利なふおをけりたるみるもたきしる
をどうり所のううりきふらしてううとぞ人のさいご
めつひのゆ——

○ク—を色ぶくつそあひいふ人の裁ふス—つり
けろこと教くふのあつたなくけつとけぶとらこ
うのいおひきへたてなくたれわら人もほごる
てみおをくづつ—うぬつしけいこちの人を
あつらう海よさらひてくも^{まじ}づありけろこと
とそつふもけぶあ色すのうら^ま真すらぞう—
ふ人の抱ぐたりすりあふたあまことむじり
みじふてつふ頭とれけりら人もあまはうあれ

ふつぬ人を誰ともなくあはたのカー—う
ちかてみることのをう—とこをせぶみか
おなごくしらひぬく志ぬつとらうぶ—おの
志ふこと頭つひてもいこく^ま真をぬと今うたふ
こと頭まてそよぐしらふおぞ志ぬめほごりの
られぬべふ人のいこぶのう—う—む^まあうら
まうれうやなどさならあるら—をのがまよ
ひまつあていひ出さるやと日^まけ—

○人のあたりつでさうらこ抱ぐてまのう—このま
海えうがいにれたれをあ—そのあたらん人を
のま—と抑ひてまこら—すぶてい—

しらぬみちの道がたりをさへ遠くしつゝ
かきこくにし

のるんわくむほおめとふ羅しゑいゑいあつて人
すいおどりもとも後世をねづつんにあつて
づかつりつやうふまきうに後世をね人なりまげ
もそは世をもうあさうからずまやうじしをい
でんとおもんよ河の奥ありてつ。約文老のほつ
るゑと果るりみちいとまこのゆさあつてび
んこいんおひねてうつほもれなれまじつ
るうでしるハクリドがたうれうつも福びの
志の人お及むは山林へ入ても饑をたせけ處

をゆせぐよすがかくてそわきぬわさなれを
をのぼくら世をじさがるスーもころこもた
らりおかれしねどのかりらむべれむてうし
りうりひなくささうらまなくむがうけ捨し
おせいんも世のことならべすうおつてび
るよ入て世をいもつん人なるひのづみりこ
とのふかひつる人の貪欲お母ふにまねく
まねの客^{すま}のまね^{なり}のまおあつてごのつづ
つくむやう人のつり人をねさんむとひらぬ
やそくまむりやをさうぬへしねもほけるお
もあつてようといとと悪くやう悪く善くやうの

行く事一のまが我が身と生れたらん志う
よをツリまをして世とのづまじこころうわら
ふかーたれひとへすーじさが取れとつとめ
てがだのすーおこじりさうんまふろけのち
見れいすーのころちとふあるまどくわ

○大事一と思ひこく人いあつんふり
らんこーはほいととげとてさながうと川べ
ふがりきづーいこもてくたぬしこもは本
さたーをさしてとく忍こし人のあざあまや
あうまをさくすと難さとししたくめ海うきてま
来もあれじううれうれあとはだん程わらじ。

抱さいかやーのやうおあどあらんまをさこ
らぬふとのこいおさうさなりてうりの行く歌
うざりもなく思ひたつ目もまべのうぞ大やう
人を見れすーおさう心あたまもくみれあのため
らあーまてうーおをさくうる道ふ火のどすー
おさう人をさうーとわらふあをたはらんやす
まを心をさるみと賊とをさてく道うらぞ
卯も余ハ人跡すものりま聖帝の来頭こころを
水火のせじりうらりも迷ふのづれごこ現あま
阿老たる親いこまがなふ子まこのおーん人のな
さげすまごーとてすてさうひや

○美家はるはすゝ感親僧都とてやんごとくなふ者老の
つゞわいもおーらとり酒をさのみまにほく
くひもつだんふハ産まも抄不たなり新しり
うづたひくもりてひびいりとみをさはく食たが
ら又もらとさらおけらふことわるまを七日
二七日などまづととあもり井て通ふやう
おらえいもづえう頭えひてたやく食てうら
病の病をやーり人スー見えすわことな。
くひとりのもづくひまるましめまづし
るまらる師道志まゆみ鐵二百貫や坊ひと
所とゆけりらとなるままうを百くしんふうま

てはま二義といとがーらのあーとさごのまま
家ら人スーあづあをまてオまりんしげくらま
ふまてふもづえう頭えひてたやく食てうら
ふ又こと用にひらもるこなくてうれあ志と
なんがりままつま二百貫をしんのまれをはげし
まらおゆうあておくまらう産ひららはこらお育
ごこまるん者らととぞ人やらまるは信都つら
法師をまてまらう頭まつふ名頭をたりけ
まらう何物づやんのまひりまらう地頭目れ
もまらう信都まらうまらうまらうまらう信都のまらう信都
んとぞいひららうのまらう信都まらうまらう信都

く大食うして讀書学生并遊人をもどられて家の法
焼なれども中一もおまきくおもつれたりされ
とも世をあらうと思ひつらくせ老うて親自由よ
て夫こころスうとごみとつよことなす出仕
して答禮など小ほく町もみや人のおす人目さ
ててまゝすまがう人すへおまきやびてひと
つうらまひと海にうけまきびとらほいふらて
ゆさけつまゝの物町色人スうむとくまきてくま
まづがくひたふとまおなかりうまきつづまま
まいておふことれどもひれもつあこもあてつづ
から大事一あれども人のまゝまゝもくれま

目さめわれどいづか敷もいおすむとすまうてう
ろおさわりうまおどらぬつひまゝぬま海なれま
人スういもつれまらうにゆまれまの嬉のい
た禮ちかゝるスうや

○西産の町ありまおまゝと事一まゝたまれまこと
まをわらす西脆衣とぐこがる町のあぐなひせ
とぐこがらせまらしおまをびりなす下ま海よ
つまゝこれこまゝとせに中法なり大魚の墨バこ
まゝとつすやまらまゝ産産の錦うのやまゝ人の
子うまゝらおまゝとまゝとまゝとまゝとまゝと
○在改門院いとまなくれり一まゝまゝる燭院八条

る人お訪こつてとてしやさせ終ひたる所
田もどつもどつれもどつぐおきしゆが
もどしとを悉をたゆゆらぬりしゆひふい
らせらふやなかり

○後七女の阿闍梨武者をうつしひらあとのつとつ
や笠人すーあひよりらり者並人としてしこ
とくしを池ひよるし一年のおいは終わりの
を換しころみゆなれを共にもらぬん事をだ
やうなうぬしかなり

○車の又もとをうなげず人すーうらげぼどにつけ
てきしむじ張流りころぬふしつぬやまの
このなりとぞうら人作られし

○はらの冠をびのりうらうらうらふたのくなら
たうなりとあ代の冠桶をりらうら人まじこをい
ふてのうら用るなり

○是中園白波感ならぬ梅れ枝すーあ一袋をうへ
ては枝すーけきてたのりすふふらし一匹齋飼下
毛聖武勝に侍られらるらりよたすー鳥けくろ
らるるしつしやうすー一枝おもたつけくろこと
とぞんじゆい候とやーたれし信もお尋られ
人くおとをせぬて又武勝もさうとのれが思
らんやうおほきをふつしきよとも作られたりけ

まじりたるもなす六梅の雪ごみ二川をかつきてふいら
じつらとまじりしを葉の枝梅に雪ごみはが
みくろやちつこころとふつく又ふたどやもつく
枝のながさ七尺或六之やぐぬし刀又ふたもふらる
雪ごみのまよ^{ナカバ}鳥とほくいころ枝ゆふすらえだる
まじりたるのまよぬまで二ふ川をぐし落のさ記
まじりたる梅のさけまろくむてふつま牛八蘭の
やうにだもびし物雪のゆえだを腐るッもて
中のまじりたるふしてふつろ大みぶりの石浜の
ふひて雪よぬとほけどもあふた梅ひの雪紙をこ
しつふぶりて迷りして二梅のゆわの雪^{カサ}欄よ

よせやくとくをぬらるれど腐にゆかてあして
まじりたる物雪とりん雪當のふれのふくれぬ程
の雪よまふりしとあふた梅ひの毛をららすこ
とま雪のふをぬしとぬるやなれをたれたりの
まじりたるふらなる雪しややえ

花より鳥つあまびとまつりなりぬ子り有らん
長月なるらとふ梅のゆき枝より雉とほけてま
あなれまやあるしれを何をもまらぬといへ
此事伊勢に換りみえたりはえらむめい
らうらうらぬらや

○賀茂の岩本橋本を業平まふや人の帯よつひ

おのほききぞ一まゝりふらしは老くまの
おしをらびとむそたづひゆーにま本を
たりお新のうつりらふとゆきを播本や
水の道とれじお新のゆきあるお尚
舟とつで花をかづりいあーおれやま
人をあくすーけりつらとらと終ひらるる
の社とらうけ結つりをさゆ建ごそけまらふ
つまがらうくおぞんじかどもこうさくそ
めとじむうもくーおつひたつらうつみ
くおがましー命お川はを海とて業どもふら
た入らる人もらうりらう何うのすー百首の

うさ張らそてうの二社のおおのあすーての
ふくまじおられりはこふやん事かふ
がまれのうて人の口おつらおかー倍え初席
おどつみぞをひく人なり
○執熊すーなたの押録使などゆふやうなり
をれくありらるがふおが録をうらげまゆみ
さくすつとてあさいごもふ二げくやまてらひ
現こもまひこーをならぬお時録の肉すー人も
がらうらるひふをけりてて敵をうひ来てての
こみさめりらるる録の肉すー共二人出きて命を
おーやがてみあをいむおーしてダのいむや

そに抄をてて自來コあくるよそれ志ぬふともみぬ
人とのかしくいころひーぬをわりのなり人ぶや
とひそれきどーぶたのこてあされくー
ほろつちねねーさやーゆとひてうせお
くろとやのくほさーぬききりくお誦もけり
かるーさう

○書写の上人の**法**後禱誦の功つもありて六根治お
うふへ万人なりと核のころをさーさのつー
きるよま意のりーをたえてまめとふりきるおけ
ゆきぶとならなとさくぬひけきぶうとーぬさ
のまらーとさうのーぬ我とさーやめさめ

とみすら福う神よのひたりのあくさめー
のうーくとなりきを我んーりする事ーの
やのぬくをのりだららな色おーこれ及力がな
こーかなりかくぬうーさめるとぞや聖さる

○**文**海の清異雲の西遊お志上をうせりー法華亭
大信教ると誦ーぬりらるるぞお慈て先が柱をさ
ぐーれたりけきとひとぬらにたりはふとこ
ろふうーい誦りらぬさるさつあられふたれ
の神供のふつら福ーよくひてとさるなり
りさるさうのなりき趣りのりきん福見きるふぬ
うげえ慈りてそれちてさうのやうさー

しらとけるもろを

○名をさくしりなぐておもづきしぞうたるうらほ
頭んらすり^をみる町し又のしそ思ひ序るまろく
のつ不志しる人ころなひきびし一福がらると
まてもぶはのんれ腕のうこをぞよそそるらん
と見え人色今みる人のわお思ひよろ過らほ
頭をさるれもひくおほゆるよや又つりならおぞ
只今人のま事もおもふ由お物^と我んいうら
もうくおことのおつづやあつしつおがとて
いけらしおこひつぞおごもおごころくありし
ちと頭をさるれららとひく心ふすしや

○つや一げからそののぬころらるるしり調度のお
かふさすくこみ筆おお母を指佛堂よほしとまれば
けまお裁しり石草木の抄や腕腕のうらすり子
孫のおかき人よあひてことむのお母を教文よ
油善にやくりつふゆせしうおほりてみくらし
おろぬも^{つら}車れ^ま文^ま密^ま塚のちりま

○お小おこり川くふる事海こそあいなふよ
やれたくしのみを^そ虚^そな^そり^そま^そも^そて^そ人い^そゆ^そ
つひなるとまおして年月も境もぬなくつとぬまを
いむたふまあくにのつりなしてあでうきつと
とめぬれむやうて又さしつとぬみらくくの物

の上手れりや—まうやふどくこをれなり人の
をるたろぬいろぐろす—神のごくくにりんせ
みりたれる人もまよは信もおこさずをとおさく
やまろぬとをなにごともおころもれなりうひ
つ—もれくをものるみどはおころ敷ていひ
比ら快をやびてうまらることくまじゆ又我も
海こし—ららずい思ひながろ人のいひ—まろ
み鼻のなごおこつれてりよままき人のうらごし
よまわ—どまふく—をむくおちが免れうく
まろぬろ—志てまなららつたぐくめも幾てつ
くろろ産ごともたろ海—れるやまがたため面目

あるや—い—いりれぬろろ産ごともをんりこく
わ—ぐりす。みぬ人の奥より産ごを揚さるなり
つ—ゆとといらんも産なくてまこぬちる産ご
産人—あるをうれていねごままつたぬべ—し
や—もおく—も色うらごしおやま世がらまつ
まのつるめつ—り—のらぬ事—思まろす—いぬた
らんようりべたがよべ—し—まもま海の人力産
が—く里生身押ご海くまこのまろろ。ようふ人のら
や—まこと紙—ころ快おくをりんどは神の奇
物産者の傳記—のまほまざるづまかおもわ—ど
是る世俗の虚言とねんごろす—まんだ—産も

かこづきしるしをわたりしかなどいふもせんぬ
とれむだくき海もくくひきくいてひと
懸ふしんぎず。又うごうひのぎげぬくくご
○燧のじくくぶつうふつとて来あよりうぶあは
目しりきりふりりやしりある老とくあ
うりふあつめあつと海家ゆりタスーい林と約
おあくじもあじおなれくごや。生張むさばり
利をりこめややじ時なくもをやしなひて何事
しうのふにたすらふくく老と死とああり。を来
くくきくやうふくく意とのるくく海ら浪き
なまろつひひご何れたのさひひのわらんふとくろ

それをおれをたうきす。み利おれがねく先達に
をふくくくくくくくみねむなりを海りなり人ハ
みきとりなり。ゆき位なりんく。張押ひて後
此の理をしり。林むなり

○つれくくくもろ人をりつなりん。まうばい
おくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
おきくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
をまくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
がひくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
小あらしひくくくくくくくくくくくくくくくく
を事しきききくくくくくくくくくくくくくくく

得失やじ阿なりさどひの上お忍るり醉の中
羨しがたすまじつていそぐしめがまてはれ
しうし人皆明くれごとくはだるこころを
を志らざとも縁とてかきかき采あしむふ
わづらうぞとてんをやくせんころとて
をの志ふともつひはくたれ。生活人より後継子
の木の枝縁とてあふまきころ。摩訶波羅門の徳也
○世のねほとくれむりなりらるころ。款も恨びと
らりて人たはくゆきとや。母なりか。○まは
師のまづつてひ入たぐえなるころ。あつて
とよとて。○あつて。ゆき。ま。も。は。う。し。を

人スーラうやくてありれん

○むかへふそのは人のまきとあつひひをたにいひ
あるらことうりあもつかよあらぬ人のうく業
肉志まで人のまきとてつとつと。縁とひえくころこ
そらけられ。縁とて。みこぼと。まなり。ひ。つ。ま。は
うし。な。ど。づ。世の人れう。ま。し。ま。が。し。く。う。が
ねま。こ。う。り。で。り。げ。り。を。ま。き。ん。を。ね。ほ。ゆ。ら
ま。ぞ。づ。い。ひ。ち。ら。ら。は。り。る
○の。ま。や。う。の。ま。や。ご。も。の。め。げ。う。ま。か。を。ひ。む。り
あもてる。ま。う。う。又。う。あ。ら。れ。ね。世。ス。ー。し。と。や。り
ま。う。や。や。ま。う。ぬ。人。の。ま。に。く。し。ま。う。う。の。人

おどめつろ時きくりてふいひけきくろあをい
さ猶ほ名おど心懸くろどちのりいひり
し目みちも境もうひかどして心きくぬ人
心ゆぢぢもえさらことふたれもふぢぢぬ人の
かならずあることなり

○河事も入たぬさ海をころぞうきなら人そ
こりこるふとてこのそ志つがやよもつふ
のこ田舎よりさう出たる人ようよろげのる
心のたれうべこさりくるをすれこれむよに
くらぢーぢーくもわれぢぢづつうもつみぢーと
心懸るけーさくくくれたりよく日れまへうら

るすりきう疎らげ口ぢもはとをぬつがこしい
さぬううみぢーれ

○人ごうお我者ふうとれ事とのそごあめめ
法師いつもをれくみら張たてあひすしうひく
すんえうぢ佛法志つたらううし連袂

後縁をたうなをあをうれぢを海りならその
まごるよりお我人お思ひあゆつれぬし
○法師のううをわうど上在袂波上人うこさ海
でそーかおて我をうのび人お海り面うぢた
あうひて首うびううともうまうぢ我勇のる紙
ふたうまお上遊う家うてあう紙をたく時勇者

みわくじと云人なり。其に夫と云ふは、
一、融、一、澤、一、決、死をなとて、後、好て、若、よ、の
ら、つ、す、づ、ま、る、が、か、い、け、ら、ん、福を、成、ま、が、こ、れ、ん
う、う、ず、人、偏、と、云、く、富、貴、も、ら、う、の、こ、も、い、ひ、ま
死、す、一、わ、く、す、い、の、ひ、て、益、な、ま、こ、し、か、り

○屏風障子おとの繕も、文字も、こゝを、物、なり、筆、や
う、て、書、こ、う、づ、み、う、く、ま、い、り、も、若、の、つ、る、志、の
け、こ、か、く、免、ゆる、から、た、こ、こ、を、こ、ろ、調、度、よ、く、も、
心、押、こ、こ、せ、う、致、く、こ、し、い、ま、あ、し、の、こ、よ、さ、い
物、を、指、る、し、と、ゆ、も、う、く、ず、換、を、成、じ、た、め、と
て、お、か、く、思、う、く、ふ、さ、油、よ、志、な、り、あ、ら、う、う、う、

ひとそ、用、な、ま、ふ、う、り、と、も、志、そ、い、ま、げ、う、う、う、い、
の、こ、な、せ、致、を、い、ふ、な、ら、あ、ら、め、の、し、き、せ、う、よ、う、
う、く、こ、こ、し、し、う、う、ず、は、り、人、も、な、く、て、福
が、う、の、う、え、ら、う、よ、致、な、り

○う、も、指、れ、表、紙、を、ぞ、見、ろ、ん、ず、ら、づ、は、び、と、い、ん
の、い、ひ、し、お、致、あ、ら、う、す、福、を、う、こ、し、も、う、づ、れ、ら
で、ん、の、袖、も、見、ゆ、う、て、後、う、う、い、み、だ、れ、と、や、
ゆ、う、う、う、ひ、ま、さ、う、て、お、が、え、し、う、一、部、に、あ、る、ま
子、な、ど、の、お、な、ど、や、う、う、さ、め、ら、ぬ、と、み、に、く、し、
と、い、る、と、お、致、滑、敷、り、福、を、う、な、ら、ず、一、部、よ、う、く
れ、ア、ん、と、お、致、し、の、を、な、ま、め、く、と、致、事、一、なり

不^レや^レなり^レころ^レよ^レされ^レと^レひ^レを^レも^レつ^レみ^レく^レお^レほ
え^レか^レら^レま^レる^レて^レ何^レも^レこ^レの^レこ^レの^レが^レま^レる^レも
わ^レか^レら^レま^レる^レに^レあ^レら^レな^レを^レさ^レて^レお^レを^レさ^レた
頭^レお^レき^レろ^レく^レつ^レふ^レの^レあ^レら^レわ^レざ^レなら^レし^レの^レま^レさ^レら
ゆ^レく^レも^レづ^レか^レら^レど^レ他^レに^レか^レて^レぬ^レ雨^レを^レの^レこ^レす^レこ^レ
なり^レと^レ或^レ人^レに^レ傳^レへ^レや^レ先^レ賢^レの^レけ^レれ^レ内^レ亦^レの
ふ^レも^レ色^レ章^レ候^レの^レけ^レれ^レこ^レの^レこ^レろ^レ傳^レ達^レ

○竹林院入る左大臣源太政大臣一のわづらとたふ
もんす。河のわづらふげりおおいせんなれども。
めづらまぎなく。一上りまやまらんとして出家志
持る。その洞院左大臣源太政大臣のこころを尊んたぬて。

お國おこぞとこれと辨ぶことなり。元^{（元）}終^{（終）}の^{（終）}悔^{（悔）}ありや
うや^{（う）}り^{（り）}よ^{（よ）}こと^{（事）}傳^{（傳）}なり。月^{（月）}み^{（み）}ち^{（ち）}て^{（て）}ま^{（ま）}り^{（り）}も^{（も）}猶^{（猶）}さ^{（さ）}う^{（う）}の^{（の）}つ^{（つ）}
り^{（り）}と^{（と）}い^{（い）}は^{（は）}お^{（お）}と^{（と）}ろ^{（ろ）}も^{（も）}義^{（義）}の^{（の）}こ^{（こ）}し^{（し）}と^{（と）}され^{（れ）}の^{（の）}つ^{（つ）}ら^{（ら）}こ^{（こ）}ら
を^{（を）}や^{（や）}れ^{（れ）}す^{（す）}。ち^{（ち）}り^{（り）}と^{（と）}ま^{（ま）}み^{（み）}ら^{（ら）}なり。

○法^{（法）}苑^{（苑）}三^{（三）}藏^{（藏）}の^{（の）}を^{（を）}登^{（登）}す^{（す）}。優^{（優）}と^{（と）}て^{（て）}所^{（所）}の^{（の）}庭^{（庭）}を^{（を）}み^{（み）}く^{（く）}そ
の^{（の）}なり^{（り）}の^{（の）}病^{（病）}を^{（を）}補^{（補）}て^{（て）}を^{（を）}道^{（道）}の^{（の）}食^{（食）}を^{（を）}ね^{（ね）}ぐ^{（ぐ）}ひ^{（ひ）}の^{（の）}り^{（り）}なる
を^{（を）}受^{（受）}て^{（て）}ま^{（ま）}げ^{（げ）}り^{（り）}と^{（と）}の^{（の）}人^{（人）}に^{（に）}ま^{（ま）}下^{（下）}す^{（す）}。よう^{（よう）}ん^{（ん）}ふ^{（ふ）}を^{（を）}死
氣^{（氣）}と^{（と）}人^{（人）}の^{（の）}國^{（國）}を^{（を）}み^{（み）}く^{（く）}ぬ^{（ぬ）}り^{（り）}と^{（と）}人^{（人）}に^{（に）}か^{（か）}ひ^{（ひ）}。お
松^{（松）}黠^{（黠）}滑^{（滑）}靴^{（靴）}傳^{（傳）}小^{（小）}持^{（持）}の^{（の）}り^{（り）}ら^{（ら）}り^{（り）}三^{（三）}藏^{（藏）}の^{（の）}か^{（か）}も^{（も）}つ^{（つ）}ひ^{（ひ）}と^{（と）}ら^{（ら）}
し^{（し）}し^{（し）}の^{（の）}や^{（や）}う^{（う）}ふ^{（ふ）}も^{（も）}わ^{（わ）}ら^{（ら）}ば^{（ば）}あ^{（あ）}く^{（く）}は^{（は）}し^{（し）}
ぬ^{（ぬ）}く^{（く）}お^{（お）}ほ^{（ほ）}す^{（す）}。

○人の心すれがさし許じつづつる事なふあしも物
ざれををれけり程正曲の人おせりなうじ
とのまじれかなし許じ人共笑みみてうやび
し尋常やうしつて是なり人をさるく笑なら
人をみて是をうくし抄やえなり和をえんづれ
めすしとあしふの和とうあずのつりりさつ
て名をたてんととややうし和をえまじりた
づるるみりてはむさうとかなすまてさるぬ
あの人を下愚の性うのねぐりては和を
と辞すべしとすうしあも是をなふべし
粗人の下ねとて大略をうし悪人がまねて人をあつす
程もあつし粗人があつす

人からと譲るふなふい譲のたぐひ森とふなふバ
兼乃流がらつりつりても笑とふれづん頭笑と
りふさし

○惟建中納言を鳳舟の女ふとめる人なりニ生精
きりて稗經うりしとま法師の弟伊後正と回者
志して侍きるすし久保よ三井ちやう後し内務
をみきてはむうとまむ法師とさうやうつれど
ちをふれむりすしを海うしとさうまさ
めといつれたりつたふ考句なりと

○下節より酒のやうすれとをんまらる事なり
字治ふ位ゆゑるれのこと氣しりて是處とてゆふ

めれらる道世の清をあらうにたりせんむづ
よ中むいびきるに或時途入りるをきりりたり
あれむりるのなり福をいほげきのをれにま
び一存せうせうとてきけをせうせんじきう
あしくよことめぬ太刀うらしききうひく
志きなれむねくおほえておほくしてゆく福
すし本懐のぼとて素良法師の兵士あふたぐ
してあひくらふり男ふらびりひて自言う
山わよあや一えうやふりくへやひて太刀
をひふぬきけきと人もみきたらぬふ矢もげれ
どくくらのやえき手紙らうとてうらむ心なく酔

くさるおんふもてゆるしりんとひた
遠きものく物ておぬは男をえきよあふては
坊を口惜りしきあけらるゆきとのききい
事一侍らばき若仕らんとすらとぬらる太刀
なしくなくけひけれことくつりてまひくま
おふりおと志のさしてぶらきとぬきとれ
と聖人おこつて出あるむ我う山ぶらうとい
ひてうらうらうらうらうらうらうらうら
たしてまた舟を打ぬきて志づりや馬を血に
たてまほ大流の流るうらうらうらうら
そのことものあふたりやうらうらうらうら

をちなり魚にふひ補ふらとおかてうききて
ふけうき命いふたまきど膝矢可換せられてう
たまにたりすうきと

○或若小野を風めりある和道郎藤素とて指さる
らり張る人西相借うけぬことよそゆらぐれ
まども空際大綱を撰きこらぬとる風吹くん
こと時代やたぐひもん整らんたゆつりなくこ
うとつひにれむさうんむらう世一うりごと
印通もやゆらたれとていふ一秘彦志とる

○奥山も新し海ことつふもれありて人をくらふ
ならと人のいひぢらふお山るうねどもあれらふ

もねらのるあぐるとして藤こまこよなりして人と
こといひのなり酒とことゆふ者ありけること何れ
流佛とうや連旁しきろ法華の流新志の色も
けりきるがやて掲めらうん者なんすづか事
すうこうと思ひ番依ひしまうらおよそ軽ゆく
頭やを連旁してさぐひとるむむとけろよ小
のころそききうしきくしねこふたあやゆた
すうしりこへふこらりまややづてうふはくゆ
ふおらびのやぐをくもんとすねんもこてふ
せづんとすうに力もなうはもこすず小川へこ
ろび入てたすきよや新しまこやくとさひ

あじ流くしり松どもともてつりりりてと
まじらふの目くらまはえん志進流ながりふをりのみ
とそ川の巾よりとつごま物うへれむ移んぐ
のうけそのおて扇小瓶かど懐すー持たり々々
もあすー入ぬ希^ケき^クあしてたまきりたるさ海ま
てまふくい流すー入まきりのひん太のくく
ひまじらふ志ふ志^マそと^マび流ふたりけれとぞ
大細き流中の石流うひしし鶏存やすう流せ
つよりれとちりてつりめりよひーあ
心とれいてくゆ来ころを流京い行くへめ流る
ろや心ししやすら流れりつこまうつりていし

りよそのめやびら流い男の法師あて又しつれそ
袖のまあま流ていりく他らん流をそん流す
とらなるやーあかしの流つりのみささるん
赤吉田とまうり流場るまをさるこなふこながり
ひーの人はとつすはら何をわくいひ出
ていこりーのぢりよあひあること米とをら
すとりひてま目つひらしこく志さるー事
つふえ流えらまー一抱はうーなひつ金八つり
まながらすとつふをろりながり吉日とまらひて
なうさるまこの末と流らぬうろう過てまむも
又ひとしう流へししをゆるるへ芝流後易のころ

ひきとみる福も存ます始つるごとくも終なき志
しこけす望ハ絶て人れ心不足なり物皆幻化也
何事か志つらくも任すらあめ理を志くこと
正者目す一息とるをみらうす画なり無日に
善を扱こなふす一かなくも善なりとり人正者
画そ人す一より望て目によらす

或人弓のつらこととてさうも曲よを終矢をたしさと
てまをふじうふ師のまゝ初心の人ふたつめや
ともつ事なりれば後のを軽てり一めめや
が紙さ望のむわり毎度只得失なくけ一勢一
まへしを思へといふ目つりふ二れや師のおお

てひとの紙をろりふきんと思ひんや悔意の心
まのつらきやをいへとも作を志す紙はつら
志め義事一に目す紙一しるを学す紙人々ふ
へおろしひるをかりひおろしを文つらひと紙
まをひてうさひで終す一終せんことを起し
つんや一刹那のうらよをひて悔意のむろ事
まをらんやらんうたぐ今の一念一をひて
まらふすりことこのまればこころ

牛をう紙まのりうら人あまう紙らひをや
てうととらんといふ紙の正に牛宛ぬりしん
と紙紙人子紙の正うらむととる人お換わつ

あつらふ人のつらきと受てしつへなる者のつらき
しつへのまほしくふらんあつらふやいゝるも又大に
乃利あつらふゆへし生つるを死く志のちらふ事
を志しつらふことうし死すしつなり人又あな
しつらふさるふうしつ志のつらき死すぬ志
を存せり一日の命義金しつらふ志ハの
しつらふ毛しつらふ種しつらふ金をめて一銭取し
あつらふ人そんありこいふおどろく死すいふおど
人あつらふを理をうししのゆへしつらふるしつら
といふ又いしつらふれを人志をにくめし生をを
とるしつらふの恨い日くたにのしつらふしつらふじや

あつらふ人うのたのたひしつらふを志してつらふおど
しつらふのたのたひしつらふを志してつらふおど
やうく死のやとびさが死すや志しつらふしつらふ
いづらふ生をたのたひしつらふして死す死す志を恐
れしつらふ理あつらふしつらふ人皆生をたのたひしつら
を死を恐れしつらふ死すおどろきしつらふしつらふ
志をたのたひしつらふしつらふ死すしつらふ死すの
おどろきしつらふしつらふしつらふの理を志しつら
と志しつらふしつらふしつらふしつらふしつらふ
常盤井相國お仕しつらふしつらふに勅書をりらふ
小面あつらふしつらふしつらふおどろきしつらふ

小水南が此の御一ハ物也と指がく下馬しし物
つり老なりつがくの老つてり夫ふつふふ
川上山へふと尸これたれし物をもれされに
タリ物書く馬のうんる物くあけてみせたり
さ序らへしにねん物くすとき

翁のうらわしくすりと付る事つりつこり
つもの待てふそとある者識の人なりたつねや
ゆつりしちくすつもの表紙一はく紙に
読されしつれも難なく文の翁にたほくハ右
まほくま翁もやらるすつものつりつり
がらとねんせられま

免ふもこやつり茶あつららこみすりあくれ
頭人ほくさをもえてほきわれしすれつりいゆ
やうんん志りておくへ

ま物よ付てま物と費ししそこなふまれ致を
とあり者よとく見わり家よ林と見え園お賭
小人に賊あり夫子小仁義あり信よはあり
たうとさひつりつひをさけりこをせ付て
一志義談とつやなつけらる童子をみ物ししふ
ふすりあひてねんし事とも

一志やとつりますやあつりつとねんよこ
とそおややうまわらうふなり

一 後世ふんごしんごのハ糖粘瓶一ともの
 ありしことなる持經中言す一りしに
 てふふ福をまのりし事なり
 一 道在者なりふにまのりしをぬやうともの
 らひてまのりし事上のやうともの
 一 上福をトらうふなり者未を忘者す一な
 った人ハ美入りなり結する人し其結に
 なりつふふなる
 一 佛を祈りふといふも初れりなり
 一 世海ありありふりて世れこととん小
 りきぬと申一はるとん

一 此亦ありし事ともおぼえし

坊川お國を義男のたれ一と人まてうれり
 たりとるをこのまのりし子基後つと大理
 たりて麻幣にこおれりし小麻をハ唐粘
 瓶とてそのりてたはゆりためりし
 瓶をせられりには唐粘をよふり信り
 媽をたすす數百年をたらし累代の
 公福の幣瓶
 りして親様とてたやまのりし事
 一 ぬ美の枝友おりたれし事や見ふ
 久我お國を攻より水なりし事
 一 出悉とてわのれし事なりしとて

かつしてその一なり

或人但大信の教書に内辨とつとめられけるに
おひまれ拍ころ蓋命ととてまゝして蓋上ととらま
まらるるまゝし海つなふ失礼なれ世にあらりるをわと
新へまおもわす思ひにまはるるまゝまゝに六
位外祀庶幾まぬころふ八女房をわくつてひては
蓋命をもまきて思ひやりおたてまらせむの
のみ

平大納言光忠入る迄御の上座をいとめられけ
流お洞院右大信及る次第をかうあらまはれを
つたふ男を師とすまらり外れお免ゆり

のふらのくまりの又又免を免たる海士のうく
ふるす一跡れる者もそそ有者流遠清政兼陳志
あつる所ひをいづを忘て外祀をわくれ者れを
大たまそいひるなりふけひつふまのりさるるく
やいらんこと志むひやうおほふやふまきるつむお
か

大免お免を習の人ともなをくを他つて
おつまらる知へんを——忠あるたりたり小
侍後大納言公的の忠ともくぬ忠守哉
こなそくまさられるるを産瓶子こととて
まらひありれけまの腹立て退出まら

意なる者の人ぢをえよ女のこくり事ある
しるまては違しくこもりぬらみ誠或人とふ
らひ終りんとて夕行くよめお母はりかな福よ
思ひて尋ねつたはす一太のこしく一をこ
おじきま下と女のあてりつるまらそとひくふ
やりて栗肉とさせて入ぬぬ心ほろあなはうり
さ海つりておすらんとやと心とる一のや一さ
板敷一志ひ一をぬるるをもて一のめ一たけ
をひのまらやりぬれ志てあまここのみ人あれ
はらそりきおせあなり遣戸よりう入ぬぬる肉
のさ海はりつこくとさあ一のすむにこく火を

ああこれがのりなれと福れまうなとみして像
ろしものわらぬ白ひつとなつてう怪なりとらと
門よりかしてよあもふもる車への志こふ
所は人のうこしくこもりのこころひうやす
恥いそぬへりうさこうらあくめくも志れひた
まはと福なけまこがれまこゆさては種のみとま
こ海やりおえあしぬに数回うふまも鳴ぬあし
のこ抱くすありあてはめやりならぬ福よらま
ふあゆのふひの島とまれやりかり急まうらま
ままをのまをれれくまやとまぬへと頼少の足
りうくくまおのさ海らまらねしすあしたゆ

みゆるからいひにたろくなれ、忘れしこと
なつひひてふら出流ふす、情も恋もめつら
むきまじりしを御心し、かて榎乃木の折母さか
おのぢくあくあそつたもみをとらぬこと
おのをりきす、さえ流りさる書ハつこうあか
つこうみさしふせたる車のなりきもおろこ
さしめさしてき、めつる月もやりのれをさるなくさ
わくぬも人になれ、ならぬ堂の席もなきくも
きつしきとみゆる男女とさく、おちりりきし
お流すは後さう何なり、おのらんつゝ、おをさ

けまねおとしむさうとみえてもいさぬ白ひ
のさとしけりさうさうおろ、けまねひなと
さうまじくおさし、さうあゆ

さ聖の枕を上人系へよつけらみゆるさるも
まさらせんおのめつひ、なりきるの口ひふた
男のしきひかして、おの馬をほつへおとして、なり
をいつ、腹のしきと、おのさかを希きの、おねお
おのす子もよれ、おのしりも、おのしりも、おのし
おのしりも、おのしりも、おのしりも、おのしりも
おのしりも、おのしりも、おのしりも、おのしりも
おのしりも、おのしりも、おのしりも、おのしりも
おのしりも、おのしりも、おのしりも、おのしりも

たれといわれればをくらひきこの押とふつのお
作らぬくやらん是れうやたら祿といふ上
人が紙つみ海をけ何こゆふを物終物草の押と
こやあらくうおつひとさきをまらなぬまを
と思はるきしふまて馬戎の包しとよあられお
くらまらうとひりくるゆさうひぬぬし
女の抱いひのけさる世事とよあ包さうあ福
にすりおとこさあうりこふ福うとよ海山院の
所明志れさう女房ともらりま男らの氣さる
ろこさうお町島やさぬ人懐とくひく心みられ者
はまなひ町の大地をとうやハ教さるぬ方し

魚もさくゆつすと昔られ々の猪川肉大屋波の岩
愈もてきてんひやらんと作られさうららと
是も難がく教なぬ方びの町とよと包められ
くらまらうとよのこ波ををんかたまうつれぬ
やうおたやちのへしとよ海去まお園白波を
押さかてお海門院のうくさく包らりせと
せ終ひらりぬまは朝さとのよさうや人の後ら
連りるやうや山踏左大屋波をあやの下の女
見事致といとまほくさくひけりひさく海く世
ううゆら連られをんれの名を世なりまら衣え
毛冠もつりおもあれひさほくろみ人を結り

町く人ふつちらら致くせんぬつつけりるつみ
ふ抱うと思ふみ女れ性そ皆ひのめ主人我の
あ町く貪欲甚してそれく理そとくそくふら
ひれこころいんもつやくうつり相もたをみ
ううー町くぬことそそやふ町いしに相さ
頭くもみましく又波あーふこそまそそすのれ
つろーつひおとあつくだらうらうそまそこ
を男の者あうそまそそらうそまそこ
こそあつらわつらそあつらそらそすれそな
そそつたがふ物け女がわろれそそそ
見思を移んこといひうらうそそそそ何のそ

女のそら町ーつらんもー女わうそそれも
うそくそそ海ー町ーらんこ海らひそ
志とーしてつまに志つこふ町そそそ
ーうそそそ海ゆるそそそ
寸陰わーび人なふあれうそそそ
愚ろそそそ人のたあふそそそ
ーそつらそそあれをうそそそ
をとつら人とがすこれそ商人のーせんそ
ひん切なり刹那おれそそとつらそそそ
ひてやそそそ命を移るそそそ
うれはる人をと致く日舟を借懸うそそ今の

一念に成るゝ思ひは事一をば一びやしも一人来
一して我いばらあをくう殊ら守失つるをてとい
苗志うとれらん子々ふのううくあひた何う
ううたのま何事一をりつとあまん我らいつる
うふの目あんうを明あまことなうん一日のう
ら小飲食便利睡眠を執りあやむこと涙とす志
てむほくの何とううなふまのふにバ能ひくく
あなうぬうらふ一芝蓋のこと涙なりびやくの
こととつひ芝蓋のことを思惟して何と報をハ
又ううす目と清しし月と目て一生張送るむを
海り也謝矣遊ハ法あ乃筆負なりううも心常

一ノ因雲の思を親うううと意を白達ハ文とゆ
涙あくうとふ志つううとこ連がふ肉を死人うう
なり光法河の底あふの何一ひとなうう肉も思
あなく外！世事なくしてやむ人いやえ終を
んん人し終せよもなかり

ま名の本れけりといひ一おのこ人をまふてく
たうま本ス一のがきて本す志をううせしし
つゆのあやうにみえし程しりふうともなうしお
ゆうとさお朝さけらうううなうてのやあらす
ふん志ておりうと詞をひあゆ一をひけうを
なりてを我お致くともおりなんののみやくい

ふろとやー侍志のしを事一よぬめとらつさぢ
つやうふがくしを八連のちろき侍連もやうす
らやうらをやうさおすーならてりなすはる
こくすーゆとつふあやー下藩のれを全人の
いあーめよりぬるの鞠もこくを蹴出して
のちやまぐとつしあるうとつと侍らたらん
後六の上とといひ人ふそれゆとといひ侍ら
はこくんとつあへりすはまこつとつとつや
りつれの侍りこくあぬへふと衆してうれてを
ほろつすこて一つ成をうく海くつふておつ
やへしやまをたまらと一人力を治の國派保

おらんみりもふーつなりと

困る後六らのみくら御一々す人の世をみ連
おもまされるあうやとそ思ふとあるひーそれ
やー志こい耳よとこくつとつやーをええ物
的目の意國へおとじくしおまうん人すーは
福になす人あうじよさとし人つひあけてんや
家の大事をこしおなを切すーおあまこく色
ある人の地力こくを考入も人れ熱悟をもとを
すとつすこくなとやとつとつひら人もなす
て年もやうくたけ病もまらつれいりんや
世をそれつれたらん人又是もたなりとつと

浦もやいひふらとされし花梅い波はくくまわ
こ成てその連車やらんことさい五丸すい海さ
こそ事さく希き男なりとて連車より
とうらめてられまきまのさい五丸を
奈の男料乃所は鯛ううはるのまさ波ふゆけ
須女房の必き一人いひあくら一人ハことつら
一人いふふりう一人もことうと付られま
春の魚とりよせうろくをばくつ
海を丸品の念地をりくろイおり入る大
頭がろくのものいひわおりあをう坊と
かわやぶりうやすとれつひひまをたりま

いそをうさくうのびくのたまふをたうや普
れとさくおん志と老なりをのれり師な人の
志とやう一人東國よとい語をうや中がろよこ
ろさ終りのと取つういま人すいあひをわて
根ささくもやと押ひて君やからいひい語
としゆくも君おりうらさるることゆん記
あくよて對面一をうしる跡を音のう待る
まんの川急へふつとあらんあれいこはまさ
さくらいつくをまうつふ結おあまられつ
うひよなうし佛事一の姉も待りしといひさ
ためて二人川原へ出わひて心ゆくらうり

つゝぬふあひてともふ志よらなりがろくと
づゝの著しるなりやるもや道世にはるむ志
舊字道字かよえらり老をりめなりたるとの
やせよすてらるる似て我れ少のく憐るをね
うふるよて闘論をふとくすぬ世を悲のを様
なれを死を種くして少もなり海さるるこのい
こきよくおぬきて人のりたりしまくふりさ
けきゆるなり

高院の号さるぬらり何のもれも若をけくろ
しとびくの人を正しとを求むく者のみま
よやまに付きるなりははくふひく業しと書

をわくはさんこきくやうるふらゆるむ
びつひ一人の名もめなれぬ文字をけりんとす
所益がふくことなり何事もめりらるるを
りこめ是れをこのひい浅きの人れりなりすめ
頭よりなりとす

友とすらよ見ろ。ま若七つり一よをさくやん事
なふ人二よをらり人三よを病なくあつらふ
人四よを酒を好人五よを茂くひさりる共六よ
をうくことすり人七よを欲少のま一人よを友こ
り一よを福をゆく友二り一はをすここよの
善悪のりとも

狸のつゆ袖ふひふら目を緩うけすとるん？
くし水も所くろをこれなれいねをうとく福す
くう軽らうらうくう所およてもさうく福なれ
そやん事なふ莫なりあよを維所うかな福也
さう松茸なとさぬ湯飯のう人おうくさうも
それ所ゆとぬくう色乃くろえ棚小福のみし所
頭と水山入る故の所免してゆらせ給てやうて
所又さうのやうの福さかうくさ福まで所たさ
ふぬてゆくこと見なうすさ福のうく頭こと也
さうくくさ人のさうくさぬゆをうくうさ
也やさうれらうさり

鎌倉の海すううととつ小魚ハ飯ころひよを
所うがま物うそははとと福なりそれも鎌
倉のさうりのやうゆくそれ莫をい連らうら
うさう世おをさむうくく志系人のおへ出事
ゆら所里事頭ハ下船もくハをさうてすてゆ
そのなりとやあうやうの物も世のすさふれ
をよさ福まをも入らう目さにくう福也
塵の物を菜は亦もなく世事かくまあも
そい園すうはほくひろふさうお連らうさも
くしてんき路うくおねのたやさうらわみらお

聖書の神ともものこととつみく事せく後志まき
くろいとを海りなりしこととて神と交をまきすこと
又そのこととたりのこととたうこととすともとふこと
ゆるやうや

やいなひのふ神よまきまはなまらうしひらこ
そつこまけきとありし時とて神なれしつり
のしぜんたをふもあよせつとめ人うとまき
こととまきつりなりまきまきしこれとたうとす
まのなれまきまきつりとめりつりすともあり
なんま外の馬靴す人て用がふものなりし
けた神のむりにこめくこととてあくれやふ馬

神とさり終り入られてまきまきし神のまき
然やじつなりしを思ひがたりしつりて思ひし
まきまきし人まきまきし人まきまきし
つり目とらりしつりしつりしつりしつりし
神のまきまきし林すし人のまきまきし
うの友とまきまきしへまきまきしにわらまき
よまきまきしまきまきし神のまきまきし
まきまきし文をまきまきし
人のまきまきし文をまきまきし
まきまきしまきまきし
まきまきしまきまきし
まきまきしまきまきし

らんたわたりけふよ醫術を習へし方をや一子
の人をたすき忠孝の心とめもいすべからんそ
の終へりとも嘆よる村馬小宗事一六藝も出せ
こりぬらすき強うりふをいふ我醫の心海こぞ
おのけてもあるへりすこれをもれりんをい
つこけりなり人こつふをうすは子食ハ人の
命なりよく味を調ふまろ人大なり強とす人志
次も細工よろつに要たかりは外のりや其結
を夫子の死る心なり病音小たくみよ急行もぬ
なりを幽玄の心夫信ふまをいふとすとのへを
今れむよやこ建紙りらて世を扱さしむる事や

やくをろりなりすりもこの金もきくれんた
鉄の蓋おぬれふりうるつこり
其蓋のこくをなして何紙紙に紙意なり人とも
僻事すり人ともいふへし國のたの者ハたの
ふやじこと紙をせしながすつふことおほしそ
のふきの紙いよくもくも思ふへし人れ力も
やじこと紙をせしつやなむ紙第一お食酒才
二一もまら物才三おぬるおなり人君ハ太一
は三もやを紙をきすらす紙面すりをうられ
すして果もよくもたの志いとひくし人
皆や下ひわり病すい優されぬまこり熱へ思

ひのたし一醫療と忠告へりしは菜とくしるて室
のこく求待とらとまらししとすば室のあさる
をとめつと決らぬのわをりといひくおじと
おこつとを室のまを候物なりし誰の人りさ
すとせん

是法と師を浄土未おつりすと人とも孝道と
はてまなく時言念地してやすうりふ世と心
すわりさ海やとわらふり

人よとえねて室十九日の佛事と我全を誇ふ
ゆしに経法つてくして管へ海をわひく
導師の心して後継の人ももつりもこと

おんおをたうやぐおんおを侍らるるに感しあは
つてとらなりと我老乃ま何ともうへつれはと唐
の拘はぬゆるんじんとやりひるまはにめし
さもあめておつりたりとさりさるたしゆのやめ
やうやハのうとま又人よ酒すくびれとてをめ
従えらるて人なりとえぬをらんとすまを教とて
人よまらびとをたすにらることなり二お小
くつふたるそのなれしものころあまつおんを
えらぬ人よしとえさしぬたりとれ建海川酔て
やうあし人よあまのころとやとほつるふり
まら心見えたりとらるるやうとわらうりつて

まゝの原をいへばそののこりなくうらひ移ん
せせんすゝのいでをうらへむとてさうあるは
ついで勝へふ町れを建てとて筑しを内を
政をうきしうらとつゝありある者中記
わくたつて思ふなふこゝもあつたためぬさう
とて筑なりと

雑居大畑さくや柳さくふまんとて大畑おも
なさくもやと柳志らり此院のを管なり人共今
波あり記すことえつとやされたりも河と
ろやとせ給けりす一雅居心書りのりんとて
のまゝさう大のりすことえつと中垣の宮と

つゝえつとやされたりす一うやあゝくにいく
柳志りて目来の内氣さたりひ録をもこ
わくことえつとやのり人たりともされたり
からを思ひすなりとやけはをめとなふことや
虚を不便なりともむく記すことえつと
よくまむせぬきる夫の内心をわたりと記す
かりたりことえつとやをうらりすことえつと
わくつてあつた人の志まらん人も毒生跡言の
たらくひかやうらりの島鞍ちいさ記中下もん
をとめすも横張みろす子と柳ひ親をなつ
柳志りし夫婦をともなひたつことえつと

やく力紙をしおを借つる事いへんと思
癩斤らゆる人しりもまさこそ甚しけれお
ろろみをあるへ命をうつくし事いつて
おつこあしつささびすへて一切の情紙を
て慈悲の心なりらんを人偏しあつて

教圓を志人よりうをかくこさしと也すへて
人をろろ志めぬをしんたろろ志をやし
の志をとうしお題のしと又つてさなふ子頭す
のしとろろしつひしほろ志つて奥すりことあり
おとなふ人を海しとなろねえしふもあつ
す心るしおさなさんよを身あしみるおろろ

おとしつりしを油あしを思謝し切なりへし
をなやとりて奥すりしと慈悲の心しつらす
おとなし人れろろこひつりつりねえしぬハ
志ふも留塵舞をれを離り美をハおる悪せする
方をやもろりも心をつりしあしひろを人をろ
おなふしと甚し病をうろろしともおほく
を心しりうは外しりさし病はろろなり菜を
のこて汗とりしひろもを志ろしなふことわれ
を一旦恥おろゆる事しあましむせしるつと
を心し志ふこなりし志を志頭しし凌雲の教
をうろて白頭の人とおろしなりしなさん物と

物ふわりうらまはをのれ紙はけて人なりとてこの
の裁者紙はらうして人紙を紙にすも信をせしり
正裁のつうひうき勝負を好じ人し勝し與のら
芝居のなりをのまこの藝のまことこころよくをよ
ろあふこれし戸もてきうなく先ゆつふふ又先
連らと裁はけて人をふろこつめんととて
文よあうひのあうなり紙へし人ふかいたく
おもも勝て裁紙をなくさ海に事紙ようじあ
まじのあふふわにみんもふ紙くも人をとらうら
あふびきくそのまのふ所まうらうこころよく
うとす先又礼ふあられされしはしゆめ奥義ふり

おらつてなりき紙をびすおれくひにほしこれ
みかつうらひ紙あのみ失なり人なり明こん
とて紙思つたなく孝心してをる紙人まうさら
ひと思ふ紙しるをふたふとるうを善なりほ
こらんとむうらおわくそふるうとてつふこ
やをう紙あふ紙なり大なり紙をも辞しし紙と
とす紙るをうく明くまんのかなり
まう志系者ハ賊をりらて礼とて老らる者も力
をもつて礼とて紙とのり多とてうらてなごる紙と
途なりやびとるこつふ平しゆらあくらん人の
めやまうなりかんとてうらとて心ぬてしけひを

と代れりめやふらりなりつゝしてきてふとふとさ
まじき力やとるるてふ誠まゝそれ病とてく
鳥羽の依りあるい鳥羽取だてられて時の号を
わくす若しりの名なりと之を親王元日の慶賀に
登基降勝ゆして大徳波より鳥羽のつらりる
てさあしつらふし孝親王元日祀よゆとや
ふらのおとくハ茶所枕なりおほく茶を拵と
して陽氣とてうくふかす孔子も素首し給
るる慶波のまらひ或し南枕つ子のこしかり
白河院を御首よは寝るつとておほいじこと也
又伊勢ハ南なり太神家の西本を御改りせさ

せりこといふこと人尸なりたつし太神家の
を祇ハつらふしびりもせ給ふ南おわす
る倉院内は美堂ハ三昧清なるの儀作こそ
やしつものつと時鏡とてつとて時つ張はく
おみく鏡とつらみくこのさあふらりて
のふつにんうくおほきてつとてさつうとあ
ふららしつれしを後おひく鏡をたうれく手
すられたらぬうら人すあつらふ事お
し西堂のつとめけりつとよわひてこやわ
こととてつとつとつとつとつとつとつとつと
あなり人も人のまのそつとつとつとつとつと

はちくくちなり我をたすして外を忘れこま
あつりつりへいひされし涙のれを忘れ
そのこまなる人やりよしこらみよひき
忘らす心のを海りなりをもちうと藝はけこま
涙をも知る方の教はぬを忘らすと心の老ぬ
涙をも忘らす病のなりをもち死のらりか
こをも忘らす涙こなるのつこらくるをも
忘らす方のうるれぬ涙忘らすかして外のう
しこをも忘らす涙のつらひ鏡にみゆきをりう
るて忘らす涙方のこと忘らすぬもやわねとす人
あつこひかひきこ忘らすにこらとそつと

あつこらちうちたぬよもひこらくきこと
もやわねとす涙こが涙忘らすこもんうやうて忘
つらうつらる老ぬと忘らすなんう涙も方涙やこ
くきこらぬをありかひや忘らすなんそを忘
思ふ事きよつらこはす人おを樂せられ
まして涙りあつりつらるをわたりこら見は
心を忘れりしてつらへを忘らすして大
おあつらる涙の藝を忘らすと涙の老つ
かり書のつらをいこらるまげり人ふ
な涙ひいつんや及をさふこそのそこり
ぬこつとこまへ来らこらこをまらり人よれそ

建人すく媚るき人のあつても恥すくわくをむ
さか流あくろにひり進てうつわく者をくらひ
しひらなりひふが流しつわくさ流を命と
をもち大うすつたあく小乗禮わとたけりふた
らざれえたり

皆善大細き入るこやさうしけり人見成案わ
中廻すく進ていゆつたを移ん程のことな
事なりとも善くあくらんたといつれい進を
に我いゆつたらんとせされけりさうそあ
うひぬ人といふれりりりくしふことしゆ
りもふねいさりゆられたつゆりまをさる

し何となふろこ海ことのかにたかほりな
ふこと流しうとひをらゆやせられたのあて
あくゆつたあされこも何ゆりなりともあふ
らあゆつたじといつれたれも進習の人く女房わ
とも奥あふつたひかりたなくはあふて
わくうり多色てふけたらん人を流石をまふ
ら流しとささめてあおまてのわら樂られ
たりりらまも我抑さなくよりさうさうひゆ
ときあくろ志らぬことゆりひさのさつとや
あつよはさうのなりくが進つた見移んとうと
事ハいつの育らむふつゆらんうあはら

